

令和3年度 国立諫早青少年自然の家
大学生のためのボランティア活動推進事業

チャレンジキャンプ

～みんなで乗り越えよう 真冬の大冒険～

令和3年12月18日（土）～19日（日）

【担当：園部 翔】



1. 事業の背景

ボランティア活動は、青少年の自立や健全育成、社会参画を促進する上で重要な役割を果たしています。そのため、当機構では各施設のボランティア・コーディネーターが法人ボランティアに対し継続的な教育的支援を実施しています。

本事業は、その一環として、各施設の法人ボランティアが自主企画事業を実施するにあたり、ボランティア・コーディネーターがその企画立案時から指導・助言に携わるとともに、事業運営における安全管理等に関わり、法人ボランティアが学びと活動を循環させながら成長していくための一助となることを目的として実施しました。

2. 事業の趣旨

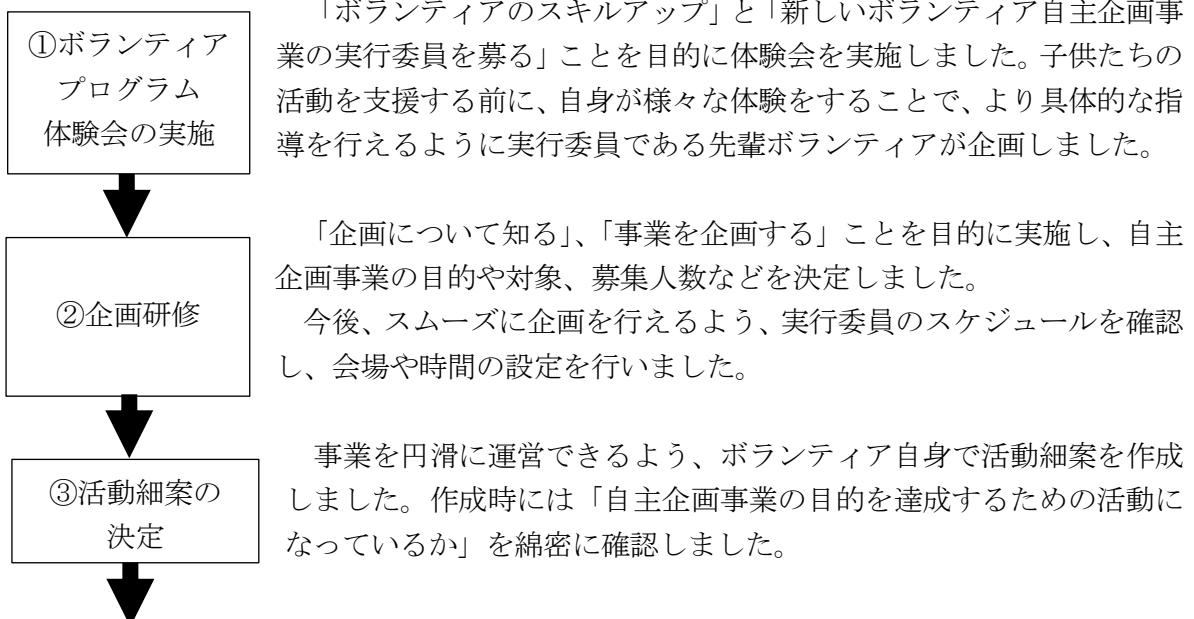
ボランティア自身が主体的に企画・運営する自主企画事業を通して、法人ボランティアの活躍の場や機会の充実を図り、ボランティアを育成する。

3. 事業の目標

ボランティアが事業の企画を体験し、多様な考え方や価値観に出会い自己成長を図る。
ボランティアが企画・運営を通して、次の行動目標を見つける。

4. 対 象 国立諫早青少年自然の家に登録している法人ボランティア 10名程度

5. 企画の流れ



↓

④事前踏査

計画したプログラムが円滑に進むかを確認するために、指導の練習を兼ねて時間配分や緊急時の対応などの確認を行いました。指導練習の際には、他者から指導内容のフィードバックを行い、質の向上に努めました。

6. ボランティア自主企画キャンプの実施

(1) キャンプの名称 チャレンジキャンプ～みんなで乗り越えよう 真冬の大冒険～

(2) キャンプの趣旨

新しい仲間と協力して行う自然体験活動を通して、人との関わりを大切にする心を育む一助とする。

(3) キャンプの目標

友達いるからできる活動があることを知る。
新しい友達を作るために必要なことを考える。

(4) キャンプの対象 小学校 3～4 年生 30 名

(5) 期 日 令和 3 年 12 月 18 日 (土) ～12 月 19 日 (日) 1 泊 2 日

(6) 参加者数 総計 24 名

	男子	女子	合計
3 年生	9	5	14
4 年生	5	5	10
合計	14	10	24

(7) プログラム

12 月 18 日 (土)	12 月 19 日 (日)
10 : 00 受付	6 : 30 起床・朝食 (レストラン)
10 : 30 オープニング	9 : 00 オリエンテーリング
11 : 30 昼食 (持参)	12 : 00 昼食 (弁当)
12 : 00 ハイキング	14 : 30 クロージング (保護者参観)
15 : 00 野外炊事	15 : 00 解散
20 : 00 入浴・就寝	

(8) 活動の様子



【オープニング】

初めて出会う子供たちの緊張感を和らげるために、じゃんけんゲームや、自己紹介ゲームを行いました。ボランティアも、緊張の面持ちでしたが、子供たちの明るい表情や言動を確認できたことで、表情が和らいでいきました。



【ハイキング】

新しい友達と協力して達成する楽しさを感じてもらうために、ハイキングに課題解決ゲームを織り混ぜて実施しました。

ボランティアは、オープニング時におとなしかった子供が野外活動を行う中で、リーダーシップを発揮していく様子に自然体験活動の魅力を確認していました。



【野外炊事】

一人一人の存在が重要であることを認識してもらうために、野外炊事を行いました。

子供たちは、「全員でおいしいご飯を食べる」を目標に役割分担を行い、協力して豚汁を作りました。

豚汁を食べながら、「僕が火をつけた」「私が野菜を切った」「食器を洗った」と自分ができたことを話す子供たちに「もし、誰か一人でもいなかったら豚汁食べれたかな、みんながいたからできたね」と声をかけると、子供たちは「うん」と答えていました。

子供たちは、野外炊事を通して、一人一人の存在が重要であることを認識していました。



【オリエンテーリング】

1日目の活動を通して、互いに認め合い、支え合う風土を醸成した子供たちは、2日目に本キャンプのメインプログラムとしてオリエンテーリングを行いました。

これまでは、近くに自分の活動班以外の多くの友達やボランティアがいましたが、この活動は、冬山の中で班のメンバーだけで意思決定をして課題を解決する時間です。

ボランティアは、子供たちがこれまでの気づきを生かして活動ができるように、始まる前の目標設定や活動中、活動後に声かけを行っていました。



【クロージング】

活動の振り返りは、まず一人一人がキャンプで感じたことを個人やグループでまとめ、全員が円になって発表しました。子供たちからは、「友達が増えると楽しい」「言葉かけが大事」などの声が数多く聞かれました。最後には、保護者の前で代表の子供が感想を発表しました。ボランティアは、嬉しさとお別れの寂しさなどが入り混じった表情をしていました。



(9) 評価

①子供たちのアンケート結果

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

②子供たちの声

- ・新しい友達ができると楽しいです。
- ・友達が困っている時に助けると仲良くなれました。
- ・野外炊事は周りの友達がいたからできました。

7. 企画したボランティアの声

(1) 企画

- ・事前に参加者について詳しく知ることは難しいが、対象年齢の子供の特性を知ることや子供の目線でプログラムを考えることが大切だということがわかりました。
- ・子供について大学で学んだ知識だけで終わるのではなく、実際に子供たちと関わることができ、企画をする前よりも子供への理解を深めることができたと思います。
- ・企画をする上で「何を」「いつまでに」「誰が」ということを決めなければ、準備がうまく進んで行かないということがわかりました。
- ・企画を進める中で自分とは異なる考え方や価値観に出会いました。多くの人との出会いは、自身の成長につながるので多くの人と出会いたいと感じました。
- ・企画を進める中で目的を確認しながら取り組むことの重要性を感じました。
- ・大人数で何か行う際は各自の動きを共有する時間を設けることで、今後の最適な行動選択をできると感じました。

(2) 運営

- ・子供への介入の度合いが多いという反省があり、子供が自分で考えて行動できるように介入の仕方や度合いを考える必要性に気づけました。
- ・活動にメリハリがつくように子供を集めてから全体に話をするといったように自分の中に対応の仕方の引き出しを増やしたいと感じました。

8. 成果と課題

(1) 成果

異なる3大学の学生が、自分たちでスケジュールを立て、綿密な企画を練り、子供たちは誰もけがをすることなく、最後まで事業を運営することができました。また、子供たちからは、ねらいに沿った感想が聞かれました。

10名での企画は、役割分担を行うことができれば、負担を減らせる一方、意見のすり合わせや対面での会議を行うための日程調整に苦慮していました。その経験からボランティアは企画時に大切にすべきことに気づくことができました。ボランティアは、大学生、社会人で構成されており、次年度も挑戦したいと新たなキャンプの企画を始めています。

(2) 課題

今回のキャンプでは、実施2日前に大雪の予報が発表されました。雨のプログラムの準備はしていましたが、雪の中での事業は想定しておらず、当所職員が介入することになりました。ボランティアの予見力や判断力をつけてもらうためにも、荒天時のプログラムについての準備を促すことが必要でした。

ボランティアが、企画・運営力を身に着けるためには実践が必要です。ボランティア・コーディネーターが中心となって当所全体で支援をしていくことが重要だと考えます。

(3) 今後の展望

学生においては、近年カリキュラムの増加などから自由な時間が減少している中、地域や子供たちのために自分の時間を活動に費やしています。熱い思いを持って多様な体験をする中で、知識や技術を身に付けていくボランティアについて、多くの方に知ってもらえるよう、SNS等の広報媒体を活用して「頑張る青少年」の姿を伝えていきたいです。

また、本事業を企画・運営する上で、ボランティア・コーディネーター以外にも気軽に相談ができるよう、プログラム体験会などでは、職員がボランティアと交流する機会を設けることで、ボランティアのサポートを当所全体で行っていききたいです。